国際交流という窓口から

積丹町立余別小学校長　東前　寛治

本校ではこれまで4人の北海道海外技術研修員の方々をお招きして、国際交流を行っています。ブータンからキンレー・ツェリンさん、チリからエミー・リベロ・ソネさん、ブラジルから秋田孝義・ウンベルトさん、マラウィからゲバース・ムゴリさんです。2年にわたって積丹町内一斉に「国際交流事業」として、また今年の冬は「国際交流・冬の集い」と称して土曜日に「カルタ大会」「餅つき大会」「雪中運動会」とともに実施しました。

子ども達がキンレーさんのお話を聞いて驚いたのは、ブータンでは小学生でも落第がある…ということでした。進級試験に合格しなければ、上の学年に進めないというのです。逆に日本の学校の印象を聞いてみると、学校は設備が整っていてすばらしく、子ども達も優秀で恵まれている…ということでした。その後もエミーさんからチリのキャンデーや、チリの子ども達が書いた手紙を、エミーさんの和訳を添えて送られて来るなど交流の芽が育ち、子ども達の外国の人々への対応も、慣れが感じられるようになりました。

生まれ育った国は違っても、人間としてお互いの立場を尊重した交流を原則とし、あくまでもより良き人間関係を学ぶ場として、更にはそのための契機として、今後も国際交流を実施していこうと考えています。その国の言葉とくらし、人として共通なものと違いに対する相互理解と誠意ある対応、ここには人権教育の基礎になる要素が含まれています。同時に、PTAとしての交流会も実施しました。学校としての交流をきっかけに、市民レベルの素朴な交流が、大人を含めて子ども達の人を見る目を変えていくだろうと思います。それは、クラスの友達を見る目、いじめを許さない目を育んでいくことにもつながる、教育の大切な役割であると信じています。

子どもたちに自信

こうした交流の後に児童たちは「初めはどんな人かなぁー、と緊張して待っていた」、「言葉は難しかったけど仲良くなれてよかった」、「また会いたいです」など印象深く、楽しかったと感想を書いている。何度か交流を繰り返すことで、最初は恥ずかしそうで遠慮がちであった子どもたちが次第にうち解けて、外国から来た研修員たちとコミュニケーションをとろうとするようになっていく。中学１年生の場合は、パソコンで学校紹介の冊子を作成するために自分たちで計画をたてて準備するなど大きな成果を挙げた例もあった。

一方で、こうした行事に参加した北海道技術研修員たちが、「児童数の少ない小さな学校の子供たちが生き生きしていることや学校の設備が立派なこと、また先生たちの熱心な姿に感動しました」、「良い交流で楽しかったが、子供たちと過ごす時間が短くてもっと時間が欲しかったです」と言った感想を寄せている。

学校交流とは別に、地元の特産品の研究をしている水産種苗生産センターや、地域の環境を考えて廃棄物の処理をしているクリーンセンターなど町立の施設を見学してその内容に感銘を受けたという声も多く、各地を訪れることで研修員たちの視野も広がったことがうかがわれた。

鳴子を手に踊りで歓迎（入舸小学校）

道内の国際協力関連イベントの情報をお届けします！

北方圏センター国際協力部では、国際協力情報収集提供事業の一環として、国際協力イベントの情報をメールにて、お送りしています。メールの配信をご希望の方は、お名前（フリガナ）とメールアドレスを、国際協力部宛にご連絡下さい。

国際協力部メールアドレス

intc@nrc.or.jp